

深江物語 (13)

本庄小学校の話 (1)

深江塾 森 口 健 一

はじめに

今回は深江のまちの数ある施設のうち、正寿寺や大日神社に次いで古い歴史を持ち、人々になじみの深い本庄小学校の物語である。この物語を記するに際しては、本庄小学校の公式記録『本庄国民学校沿革史』や『本庄小学校同窓会誌』（創刊号、八十年記念誌など）、昭和十三年卒業生文集を主な文献として参考にした。また昭和二十年以前の卒業生や、筆者の同級生や後輩の昭和三十年代から四十年代の卒業生からも直接聞き取りも行った。取材に際してご協力いただいた方々については、文献と共に最後に一括して記す。

なお、小学校の公式記録『本庄国民学校沿革史』は昭和二十年（一九四五）五月十一日の空襲に



写真1 深江小学校時代の地理の教科書

よって戦前の分が焼失し、昭和二十一年六月五日に、当時の藤田幸伸校長が再編成した。従って戦前の記述

は極めて簡略になっている。

「本庄小学校の話」という題名は、取材した言葉や文章を物語風に記述したことからつけた。本稿は、まず主として時系列に沿って戦前の学校の移り変わりを記した。

学校創設―深江小学校と青木小学校

明治二十二年（一八八九）まで

は本庄村は深江村と青木村、西青木村に分かれていた。学校の前史としてはそれぞれに寺子屋があったが、明治五年（一八七二）まず深江の正寿寺に深江小学校、さらに明治六年に青木の無量寺に青木小学校が出来た。深江小学校時代の教科書が史料館に残っている（写真1）この頃の小学校は、まだ義務教育ではなかった。明治十九年（一八八九）国によって小学校令が定められて、尋常小学校が四年間の義務教育となった。

明治二十二年に深江村と青木村・西青木村が合併して本庄村となると、学校の統合が構想され、明治三十二年四月十日には、本庄村はかつての深江村と青木村のほぼ中央の地（現在の本庄小学校所



写真2 明治後期の本庄尋常小学校。校門には裁縫学校の看板もあった



写真3 本庄尋常高等小学校の前の忠魂碑

在地)に本庄尋常小学校を設立することとした。直ちに校舎の建築にかかり、明治三十三年三月三日には校舎落成式が挙行された。神戸市立本庄小学校は、この落成式の日をもって創立記念日としている。なお、尋常小学校には明治三十六年に本庄裁縫学校という名の裁縫科が併設された。

初代の小学校の校舎は木造平屋建てで校舎玄関は建物のほぼ中央、校門は校庭の南にあった。校門の左右、向かって右に本庄尋常小学校、左に本庄裁縫学校の名前が書かれていた(写真

2)。創立の三年後には、高等科がおかれて本庄尋常高等小学校となった。

大正元年(一九一二)に、校庭の西寄りに日清、日露の戦役で亡くなられた方の慰霊のため忠魂碑が在郷軍人の人たちによって建てられた(写真3)。『本庄国民学校沿革史』には「大正元年十月三十日校庭西側二東面シテ老松ノ茂ル南側ニ忠魂碑ヲ建設シノ除幕式ヲ盛大ニ挙行ス」と記録されている。

二階建て木造校舎と鉄筋校舎

大正九年(一九二〇)七月十二日、校庭の拡張と共に木造二階建ての新校舎が完成した(写真4)。上棟式は同年三月四日でその様子は「木造二階建本館ノ上棟式ヲ挙グ。形式上南ヨリ見レバ偉観ヲ具備」と記録が伝えている。同時にそれまでの校庭が東に三二坪(約一〇〇〇平方メートル)広がった。

大正十二年の地図を見れば、学校の南は西国浜街道を隔てて松林が広がっていた。「撰津名所図会」にも描かれ、里歌にも歌われた「踊松」である。

校庭が南に拡張されるまでは、このあたりには小規模ではあるが墓地があったそうで、校庭拡張工事中には、幾つかの骨壺が出てきた。それらの骨壺は素焼きの蛸壺のようなもので、その多くは破損していた。

昭和四年(一九二九)

四月十五日、校庭の西端に既存の木造校舎に接して鉄筋二階建ての八教室を持つ校舎が増設された(写真5)。この校舎は昭和天皇御即位記念事業と



写真4 大正9年完成の本庄尋常小学校

日の校舎完成の一日前のことである。この村役場は、本庄村が神戸市と合併後は、昭和三十三年から本庄公民館として住民に利用されていたが、平成四年（一九九二）解体された。

昭和四年の春、第一三代校長として岩谷省三先生が着任された。先生は道徳修身の先生でもあり、昭和四年から昭和十六年まで在職された。二、三年で転勤交代のある校長先生の任期としてはめずらしいことである。この間に昭和八年には「給食場ヲ



写真5 左手が室戸台風時に避難した鉄筋の建物
(1930年2月17日、本庄小学校提供)

して建設されたものである。昭和九年の室戸台風時には、児童たちが先生たちにあるいは抱かれ、あるいは手を引かれて、二階建て校舎に避難した。お蔭で全員が無事であったことは、幸いな記録として伝えておくべきである。

西国浜街道を隔てて学校の南に本庄村役場が、校舎同様に御即位記念事業として新築された。完成は昭和四年四月十四

設置シ貧困児童ノ給食」を実施された。この頃、我が国は昭和の大恐慌の影響下にあり、弁当を持って来られない所謂「欠食児童」が本庄にも少なからずいたという。また、校内に医務室を設置し、夏には深江浜にて水泳練習を開始し児童の健康増進に注力された。

卒業生が語るのには、なんといっても先生の強い要請によって昭和十二年新築の三代目の校舎屋上に「五輪の塔」が建てられたことだろう（このことについては後に詳述する）。岩谷省三先生はその後、精道小学校の校長を経て、昭和二十年本庄村村長となった。遺徳を偲んで教え子たちが立てた墓は、今でも本庄小学校北にある本庄墓地の中にある。

室戸台風

昭和九年（一九三四）九月二十一日の朝七時過ぎ、気象観測史上最強といわれる室戸台風がこの地を襲った。

「昭和九年九月二十一日午前七時頃ヨリ：高潮ニ遭ヒ教室、運動場亦海水ニ洗ハレ：机、腰掛等浮キ流レ始メタルタメ：登校セシ児童ヲ辛ジテ西鉄筋校舎ニ誘導シ：無事ナルコトヲ得タ」と学校の記録にある。



写真6 室戸台風当時の
深江南町4丁目附近

この記録にあるように台風は暴風もさることながら記録的な高潮があった。高潮の様子を当



写真7 室戸台風後の浜戎神社付近

時の児童が作文に残している。「校庭が大きな池のようになつたようで、用務員のおじさんが胸まで浸かっていたのを見た」

水位が一メートルに及ぶ高潮であつたことが推測できる。学校の南は、松林と葦の葉が茂る平坦な地が海辺までと続いていたから、高潮は海からさえぎるものなく校庭や校舎に押し寄せた。

後に漁師になつた男性も以下のように書き残している。

「地引網の大きな船が：札幌通りの阪神の踏み切りを越えて水会社のほうまで北のほうに流されていった」

地引網の船は、現在の深江南町から深江北町、本庄町付近まで札幌通りを波に乗って流れていった。舟は海岸にある浜戎神社あたりの浜辺に引き上げられていたものだろう。

浜戎神社あたりの台風後の様子が写真に残っている（写真7）。深江の漁師の中には、高橋川に繋留している持船の様子を見に

行つて波にさらわれた人もいた。その人は、船から波にさらわれて沖に流されていった。ところが風向きが変わつて、南よりの風と南から押し寄せる波が、その人を浜辺に運んで高橋川の東の浜辺に打ちあげた。大きな怪我もなく奇跡的に助かつたうだ。

本庄自慢の鉄筋校舎

昭和十二年（一九三七）三月三日、鉄筋三階建て校舎の竣工祝賀会が開催された。三年前、昭和九年の室戸台風の被害の経験を教訓にした建物である。それまであつた二代目木造校舎は、建てられた大正時代は遜色ないものだったが、昭和の時代になつてからは、「近隣の学校に比べて貧弱だ」と、児童も親たちも「肩身の狭い思いがあり、学校に対して誇りを持つことができなかった」と思い出として語っていた。この児童の言葉は、当時の教員であつた中島実先生の「児童を引率して他校を訪問したときの児童の表情にそれが表れていた」という話と重なる。そのため、三代目のこの校舎の完成は村を挙げての喜びだった。



写真8 五輪の塔を持つ本庄小学校

この新しい校舎には屋上に避雷針が建てられた。この避雷針の鉄柱には水平に約一尺（約三〇センチ）の間隔をあけて五つの輪が取り付けられた（写真8）。後に本校のシンボルとなる「五輪」である。この塔「五輪」は、道徳修身の先生でもあった岩谷省三校長先生の強い意向が反映されている。普通の避雷針よりも強度も必要だし、輪の制作費も必要である。村の財政の問題から「五輪」設置反対の声があった。しかし、避雷針を「五輪の塔」とすることを先生は強く希望した。この「五輪」は、中国の古典にある「五常」「五倫」の道徳的な意味が表現されている。「五輪の塔の意義」に賛同した深江の篤志家の方々が塔の設置にあわせて「二宮金次郎」の石像を寄贈した。篤志家の氏名は像の後ろに刻まれている（藤川祐作「本庄小学校の二宮金次郎像」『生活文化史』第四一号号参照）。

戦争体験

昭和十六年（一九四一）十二月八日に、我が国はハワイの真珠湾攻撃と共に、米英に対し宣戦布告をなし完全な戦時体制に入った。この年の四月には全国の小学校は国民学校と称変更した。本庄小学校も例外ではなく本庄国民学校となった。

本庄国民学校の児童は、昭和二十年に入ると共に始まった米

軍による当地への空襲から逃れるために、深江の地を離れ「疎開」していった。疎開先は兵庫県播磨地方の、いわば過疎地にあるお寺だった（写真9）。集団疎開とは別に、空襲の目標から外れそうな土地に親戚のある児童は、個別に「縁故疎開」が行われた。（戦争と疎開の体験については拙稿「深江にあった戦争1〜3」『生活文化史』第四六〜四八号参照）。

昭和二十年（一九四五）当時、本校の南の海岸に川西航空甲南工場という海軍の飛行機を製作する大きな工場があった。この工場を目標に米軍のB29という超大型の爆撃機による空襲が本庄地区にもあった。

深江における空襲体験は昭和二十年五月十一日の爆弾攻撃と、六月五日、八月六日の焼夷弾による空襲である。これらの空襲で深江地区の住宅の大半は破壊され焼失した。ちなみに、東灘から阪神間にかけてのこれら空襲の惨禍を描いた物語に、有名な



写真9 神崎郡の寺院での疎開（『神戸の百年』所収）

時半過ぎ警報下に敵B29十数機が西南方の白雲中から突如下向姿勢を見せた。直ちに運動場警備員の中島実訓導から敵機襲来、退避を絶叫：役場の吏員中、学校に避難していた二人の女事務員はその場で即死していた：勅語膳本等を護持した巽節子訓導は之を前胸に固くしばって壕より六甲山方面に避難した：やがて二階中央部より火を発したが水一滴出ず：ついに校舎の中央部を焼失した」（原文はカタカナ混じり文）

「二階中央部から火を発し：校舎の中央部を焼失した」という



写真 10 空襲を受けた本庄国民学校

野坂昭如『火垂るの墓』（新潮文庫他）がある。本校被害の大半は、五月十一日の爆弾攻撃によるものである。この日の空襲はB29爆撃機からの二五〇^キ爆弾によるもので、建造物破壊を目的としたものである。本校も十数発の爆弾を受けた。

この日の空襲の様子は、かなり詳細な公式記録として残されている。以下は、その記録の抜粋引用である。

「五月十一日午前十

中央部は講堂のある場所であり、その屋上には東西に二本の五輪の塔がたっていた（写真10）。講堂の屋根は焼けたので戦後も永らくその傷跡が残っていた。雨漏りもあった。この講堂はその後も台風のために屋根が破損し、校舎の被害を一手にひき受ける役目を担っていた気がする。

空襲の中、「勅語膳本を胸に抱いて避難した」とある勅語膳本は校舎の南にあった奉安殿に納められていた（写真11）。校庭には奉安殿の西に隣接して馬に乗った楠木正成公の像もあった。奉安殿、楠公像は忠魂碑とともに昭和二十一年秋より順次無くなった。

続く後編は阪神・淡路大震災までの「昭和時代の本校の歴史を中心の記述」と、「老松と忠魂碑」「校歌と五輪塔」「二宮金次郎像」などを予定している。



写真 11 奉安殿の前の岩本校長（左）
中央は松井善太郎郎長